

折に触れ 四字熟語

NO. 70 『河梁之別』 かりょうのわかれ

< 意味 > 一般に送別のこと、人と別れること。また、親しい人を見送るつらい別れのこと。もとは人を見送って橋の上で別れる意。

中国漢代に、異民族の匈奴に捕らわれていた李陵^{りりょう}が、同じく匈奴に捕らわれていた蘇武^{そぶ}が中国に帰るときに惜別の詩を送ったという故事から。「河梁携手（かりょうけいしゅ）」「河梁之吟（かりょうのぎん）」「河梁之誼（かりょうのよしみ）」も同じ意味です。

< 出典 > 「文選」^{もんぜん} 雑詩 上

與蘇武三首（蘇武に^{あた}與^{さんしゅ}ふ、三首）

李少郷（李陵）

（その三首目）

携手上河梁	遊子暮何之	手を携 ^{たづさ} へて河梁 ^{のぼ} に上る、遊子 ^{いうし} 暮 ^{いづ} に何 ^ゆ くにか之 ^ゆ く。
徘徊蹊路側	悵悵不得辭	蹊路 ^{けいろ} の側 ^{かたはら} を徘徊 ^{りやうりやう} して、悵悵 ^じ として辭 ^じ するを得ず。
行人難久留	各言長相思	行人 ^{かうじん} 久 ^{がた} しく留 ^{おのおの} まり難 ^{あひおも} し、各々 ^{おのおの} 長 ^{あひおも} く相 ^{あひおも} 思 ^{あひおも} ふを言 ^{あひおも} ふ。
安知非日月	弦望自有時	安 ^{いづく} ぞ日 ^{じつげつ} 月 ^{あら} に非 ^{あら} ざるを知らんや、弦 ^{げんぼう} 望 ^{おのづか} 自 ^ら 時 ^{あり} 有り。
努力崇明德	皓首以爲期	努力 ^{めいとく} して明 ^{たか} 徳 ^か を崇 ^{かうしゅもつ} くせよ、皓 ^き 首 ^な 以 ^て 期 ^を と爲 ^{さん} さん。

通 釈： 手を取りあって橋の上に立った。旅立つ君はこの日暮れ、どこに行こうとするのか。相共に小道のほりを行きともどりつ、別れのつらさにいとまを告げる言葉も出ない。さりとして旅立つ君は長く留まることもかなわぬので、互いにいつまでも忘れまいぞと言いかわすのみである。しかし、人が別れてまた会うのは、月日の循環するのと同じでないか。半月の時もあれば満月の時もあり、日と月とが互いに相望むこともあるように、二人がまた相会うこともないとは限らぬ。どうか努めて明德を高めていただきたい。白髪になっても必ずお目にかかりましょう。

語 釈： 「河梁」は河の橋。「蹊路」はこみち。「悵悵」は悲しみかえりみるさま。「皓首」は白髪の頭、老年。

一 言： 別れシリーズ その1

3月は、学校の「卒業」や会社における「転勤」に伴う別れの季節です。

私事ながら、入社してから10数年後、同じ支店に配属になっていた親しい同期に、私も熱望していた本社転勤の辞令が下りました。別れの寂しさだけではなく、妬みを含んだ羨ましきもあって複雑な思いであったことを今でも覚えています。見送ったのはもちろん橋の上ではなく、新幹線のホームでのことでした。

参照文献： 新釈漢文大系「文選（詩篇）」下 岩波書店「四字熟語辞典」